伝えたい

まちの遺産

北陸の宿場町だった今庄地区今庄には、今も造り酒屋や商店など当時栄えた時代の町屋がその面影を残しています。

その一つ、京藤甚五郎家は、町が建物、敷地全ての寄付を受け、町の資産とし活用していきます。

天保年間の造り酒屋　京藤甚五郎家

【うだつの上がった古い家】

家屋は、木造瓦ぶき二階建て、延べ244㎡で一階七室、二階に二室の部屋。建築年代は、江戸時代の文政元年(1818年)今庄の大火の後に建てられたのではと言われ、仮建築の後、今庄宿で酒造業を営んでいた幕末の絶好調の折、先々代甚五郎の父(蓮二氏)が思い切った投資で設計、建築部材や室内意匠(欄間など)には随所で凝った点が見られ、当時でも自慢に値する吟味したもの。厚い壁と土戸で周囲を覆った本格的な土蔵造りで、屋根にはうだつ(大屋根の両側の小屋根―繁栄の象徴)を上げ、完全防火構造となっています。

【造　り】 主屋の左に前庭と通常出入りする玄関とは別に式台(板敷き)を持ち、奥に座敷を配置する本陣形式で、部屋は厚い壁で仕切られています。玄関の戸を開け、高い敷居をまたぐと土間。続いて台所と板の間。泥棒が昔、寝ていたともされる太い梁は弓なりに組み上げられ、その下にいろりの跡があります。大黒柱には特大寸のものを据え、豪華さを表現してあります。

【歴　史】 京藤家は参勤交代の時は脇本陣格であったと言われています。「菱大(ヒシダイ)」という屋号で造り酒屋、養蚕を営み、明治以降は金融業を営みました。幕末の歌人、橘曙覧や明治維新の立役者、岩倉具視が滞在し書いた書、武田耕雲斎率いる水戸浪士が宿泊した際の刀傷が残り、明治時代のスイス製の時計が今も時を刻んでいます。

先日訪れた京藤倫久さん(東京都在住)は、「文化や歴史はその地にあって息吹くもの。祖先が守ってきた場所で歴史を引っ張っているから価値もあり資産だと信じています。まちづくりの糧となり皆さんの心を癒す、オアシスになれば大変嬉しい」と語られていました。

～和の風～　町長随想

増澤　善和

ホタル

・おさな児の蛍呼ぶ声初蛍

―井上六治―

ホタルは初夏の風物詩である。先日、福井県ホタルの会から「螢(ホタル)」という研究会誌が届けられた。これには、昨年六月の福井県下(奥越から小浜までの約三十地区)におけるゲンジボタル・ヘイケボタルの発生状況調査結果が発表されている。調査したのは福井工大の草桶秀夫先生・同校博士課程の学生とホタルの会のメンバーである。この結果を見ると、六月二十二日の夜八時半に南今庄の鹿蒜川で観測したゲンジボタル三千頭以上は、他の地区に比べ断然トップの状況であった。今庄地区でホタルの生息状況に詳しい小山喜一氏(社谷)に先日現地を案内して頂き、毎年六月十日から二十日頃にかけ上新道～下新道～南今庄～かひるニュータウン近くまでの鹿蒜川両岸四km以上にわたってゲンジボタルの大乱舞が見られるとのお話を聞いた。堤防も比較的整備され、子ども連れでもホタル狩散策が楽しめるルートであろう。

さて、ホタルは古くから日本人に愛されてきた。奈良時代の日本書紀(七二〇)に「彼地には螢火光る神多くあり」や平安時代の紫式部の源氏物語に「源氏、螢の光を借りて玉鬘(タマカズラ)の容姿を示す」とある。

ホタルの語源は火垂(ホタレ)。火をホと呼ぶは、火の気(ケ)・火枝(ホエ)なども。英語も同じようにファイアフライ(火のハエ)である。

・恋蛍暗き水面に火を燃やし

―今村和夫―

最近、農薬や融雪剤の影響でホタルが見られなくなった所が多い。特に里田近くに生息するヘイケボタルが絶滅に近いのは、ホタルの餌となるカワニナ(タニシをスリムにしたような巻貝)が汚染に弱いからだろう。川水を守れば幻想的な蛍火で人の心も癒されることだろう。ご自分の家の近くの川や庭でホタルを生息させたい人には「ホタルを飛ばそう―村上光正著」を推薦したい。(南条図書館)

・幻の蛍となりし蛍川

―山本千代―

(・俳句は俳句歳時記「昆虫」より)